

# 茶道史の一こま

——天正十八年十月豊臣秀吉湯山阿弥陀堂茶会について——

森田雄一

## はじめに

文書館の相談業務の中に、時折、書・画賛・消息などの内容の質問や説明をして欲しいと来館者から依頼されることがあるが、解説などは原則として判読不能部分のみとし、出来得るものは或程度の対応をしている。以下に紹介する文書は、茶道史の記録としても良質のものと思われるるので、敢えて例示する次第である。

## 一

ところで、近年浦和市在住の加藤勝重氏が蒐集し、本館に持参された文書がある。(写真2)冒頭部分が一部欠損し、水損のための磨耗が著しいものであるが、筆跡・料紙からみて、少なくとも慶長期を下らないものと推定される。幸いにして欠損部分は前出の茶会記により補完することが出来るが、これによると前出の茶会記は、参会者の半数を記したに過ぎないことが判明した。因みに残りの人びとは、四番 小寺高友・施薬院全宗・竹田定加、五番 長谷川宗仁

天正十八年(一五九〇)九月豊臣秀吉は、小田原北条氏をはじめ奥州を平定して帰洛し、九月二十五日より十月十四日まで休養のため、摂津の有馬温泉に赴き、半歳にわたる戦陣の疲れを癒した。この間十月四日には、湯山の阿弥陀堂において、茶会を催しているところが、五島美術館所蔵の「北向道陳茶会記」と称される一軸により

天正十八年十月四日

於有馬御茶湯次第事

阿弥陀堂て茶湯御座敷二畳敷

一 御床 きたうのほくせき かけて

一 長左衛門か ぐたにいとをとおし床のはしらニかけさせられ 花入 菊の物一ツ入

一 御かま うりかま 五徳すべ

一 志ぎかたつき いてう水の間ニたなに茶わんかたつきおきあわせられ候なり

一 いどちやわん おりため

一 志賀の御壺 をかつてのうちに金ひやうふをひかせられおきあわせられ候

近來サミ之御作前ニテ御座候

一 水指 ひせん物 水こぼし 竹かくれか

めんつう

以上何も利休茶たう被仕候也

客来 一番衆 利休 小早川 有馬法印

同 二番 善福寺 阿弥陀堂 池坊

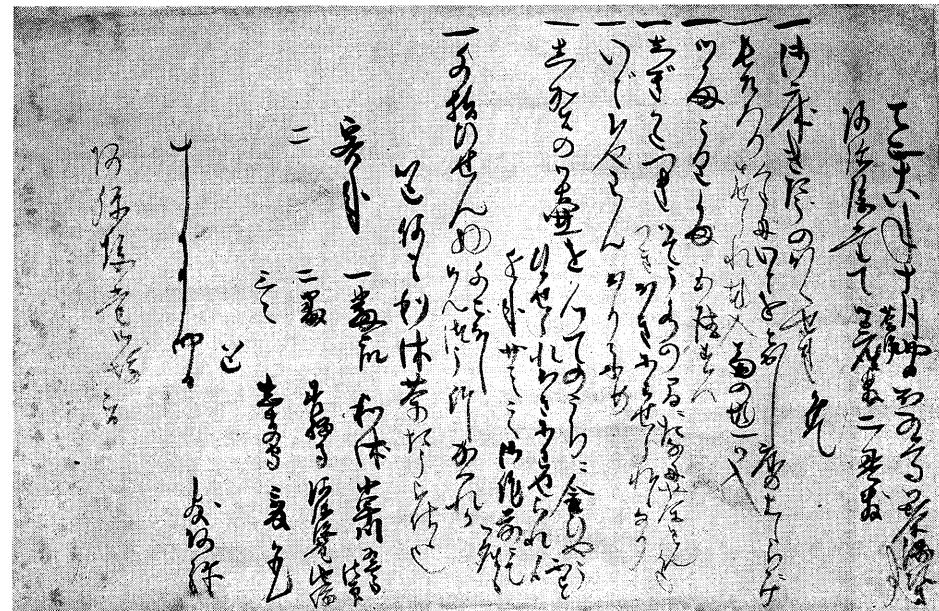
三番 志まの守 宗及 かもん

以上

教阿弥

阿弥陀堂御坊

まいる



天正十八年十月四日

上様於湯山阿弥陀堂御茶湯有之

一 虚堂墨蹟

一番 利休

二 隆景

三 善福寺

四 池坊

五 盆カ

六 有中  
七 隆景  
八 利休

九 入

十 盆カ

十一 以上

十二 関白様

十三 藥院

十四 利休

十五 隆景一人

十六 五日

十七 茶人奥山肩衝

十八 濑戸天目

十九 高麗筒花入

二十 一ノ湯

廿一 掃部

廿二 四番

廿三 休夢

廿四 藥院

廿五 竹田法印

廿六 五番

廿七 下刑法

廿八 宗安

廿九 樋ノ口

三十 柏左京

卅一 毛利壹岐

卅二 以上

卅三 何れも茶堂利休

卅四 以上

卅五 六番

卅六 七番

卅七 八番

卅八 九番

卅九 十番

四十 一一番

四十一 二番

四十二 三番

四十三 四番

四十四 五番

四十五 六番

四十六 七番

四十七 八番

四十八 九番

四十九 十番

五十 一一番

五十一 二番

五十二 三番

五十三 四番

五十四 五番

五十五 六番

五十六 七番

五十七 八番

五十八 九番

五十九 十番

六十 一一番

六十一 二番

六十二 三番

六十三 四番

六十四 五番

六十五 六番

六十六 七番

六十七 八番

六十八 九番

六十九 十番

七十 一一番

七十一 二番

七十二 三番

七十三 四番

七十四 五番

七十五 六番

七十六 七番

七十七 八番

七十八 九番

七十九 十番

八十 一一番

八十一 二番

八十二 三番

八十三 四番

八十四 五番

八十五 六番

八十六 七番

八十七 八番

八十八 九番

八十九 十番

九十 一一番

九十一 二番

九十二 三番

九十三 四番

九十四 五番

九十五 六番

九十六 七番

九十七 八番

九十八 九番

九十九 十番

一百 一一番

一百一 二番

一百二 三番

一百三 四番

一百四 五番

一百五 六番

一百六 七番

一百七 八番

一百八 九番

一百九 十番

二百 一一番

二百一 二番

二百二 三番

二百三 四番

二百四 五番

二百五 六番

二百六 七番

二百七 八番

二百八 九番

二百九 十番

三百 一一番

三百一 二番

三百二 三番

三百三 四番

三百四 五番

三百五 六番

三百六 七番

三百七 八番

三百八 九番

三百九 十番

四百 一一番

四百一 二番

四百二 三番

四百三 四番

四百四 五番

四百五 六番

四百六 七番

四百七 八番

四百八 九番

四百九 十番

五百 一一番

五百一 二番

五百二 三番

五百三 四番

五百四 五番

五百五 六番

五百六 七番

五百七 八番

五百八 九番

五百九 十番

六百 一一番

六百一 二番

六百二 三番

六百三 四番

六百四 五番

六百五 六番

六百六 七番

六百七 八番

六百八 九番

六百九 十番

七百 一一番

七百一 二番

七百二 三番

七百三 四番

七百四 五番

七百五 六番

七百六 七番

七百七 八番

七百八 九番

七百九 十番

八百 一一番

八百一 二番

八百二 三番

八百三 四番

八百四 五番

八百五 六番

八百六 七番

八百七 八番

八百八 九番

八百九 十番

九百 一一番

九百一 二番

九百二 三番

九百三 四番

九百四 五番

九百五 六番

九百六 七番

九百七 八番

九百八 九番

九百九 十番

一千 一一番

一千一 二番

一千二 三番

一千三 四番

一千四 五番

一千五 六番

一千六 七番

一千七 八番

一千八 九番

一千九 十番

二千 一一番

二千一 二番

二千二 三番

二千三 四番

二千四 五番

二千五 六番

二千六 七番

二千七 八番

二千八 九番

二千九 十番

三千 一一番

三千一 二番

三千二 三番

三千三 四番

三千四 五番

三千五 六番

三千六 七番

三千七 八番

三千八 九番

三千九 十番

四千 一一番

四千一 二番

四千二 三番

四千三 四番

四千四 五番

四千五 六番

四千六 七番

四千七 八番

四千八 九番

四千九 十番

五千 一一番

五千一 二番

五千二 三番

五千三 四番

五千四 五番

五千五 六番

五千六 七番

五千七 八番

五千八 九番

五千九 十番

六千 一一番

六千一 二番

六千二 三番

六千三 四番

六千四 五番

六千五 六番

六千六 七番

六千七 八番

六千八 九番

六千九 十番

七千 一一番

七千一 二番

七千二 三番

七千三 四番

七千四 五番

七千五 六番

七千六 七番

七千七 八番

七千八 九番

七千九 十番

八千 一一番

八千一 二番

八千二 三番

八千三 四番

八千四 五番

八千五 六番

八千六 七番

八千七 八番

八千八 九番

八千九 十番

九千 一一番

九千一 二番

九千二 三番

九千三 四番

九千四 五番

九千五 六番

九千六 七番

九千七 八番

九千八 九番

九千九 十番

一万 一一番

一万一 二番

一万二 三番

一万三 四番

一万四 五番

一万五 六番

一万六 七番

一万七 八番

一万八 九番

一万九 十番

二万 一一番

二万一 二番

二万二 三番

二万三 四番

二万四 五番

二万五 六番

二万六 七番

二万七 八番

二万八 九番

二万九 十番

三万 一一番

三万一 二番

三万二 三番

三万三 四番

三万四 五番

三万五 六番

三万六 七番

三万七 八番

三万八 九番

三万九 十番

四万 一一番

四万一 二番

四万二 三番

四万三 四番

四万四 五番

四万五 六番

四万六 七番

四万七 八番

四万八 九番

四万九 十番

五万 一一番

・万代屋宗安・樋口屋紹札（カ）、六番 柄植與一・毛利吉成の三組八名と推定される。また豊臣秀吉は、翌十月五日にも同じ阿弥陀堂で、小早川隆景一人か、或いは施薬院全宗・小早川隆景・千利休の他に氏名不詳の者一人を招いて、（この文書上からどちらとも云えないが）前日とは異なる道具組みで、茶会を催していることがわかる。

おわりに

天正十八年八月十七日から翌十九年閏正月二十四日にわたつての記録と云われる「利休百会記」は、前後に頻繁に茶会が開かれているにも拘らず、九月二十四日から十月二十五日までの一ヶ月の間記載がなく、空白期間となつてゐる。これは、利休が秀吉に隨行して有馬温泉に赴き、留守であつたことと推察すれば納得し得るし、利休の晩年の行動の空白を補う史料として、この文書は評価し得るものと思われる。